

青梅市文化財ニュース

第 3 8 4 号

令和元年 1 0 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

青梅での空襲

元号は、平成から令和に変わり、太平洋戦争があった昭和は、ますます遠い時代になってしまいました。

昭和 16(1941)年 12 月 8 日に始まった太平洋戦争では、昭和 20(1945)年になると日本軍は完全に制海空権を失い、3 月 10 日の東京空襲などにより、主要都市は、ほとんど破壊・焼失されてしまいました。

青梅市域は、大編隊の集中攻撃は受けなかったのですが、戦闘機の機銃掃射、傷ついた友軍機・敵機の墜落など、^{かれつ}苛烈な戦争の一端を体験しました。

しかし、現在、戦争を知る人々は少なくなり、普通の人々に関する戦時の記録は多くはないうえ情報もまちまちです。そんななか、今夏、東青梅駅構内の電車への空襲について聞く、貴重な機会を得ました。青梅市市民安全部市民安全課の平和事業の一環で、戦争当時を知る人から多くのことを学び、後世に伝える取り組みの一つです。

この空襲被害を中心に、青梅での空襲について報告します。

1. 東青梅駅

昭和 20 年 2 月 25 日午前 9 時頃、都立第九高等女学校(現多摩高)2 年生の牧野寿枝^{すえ}さんが、東青梅駅構内の電車への機銃掃射により、亡くなりました。牧野さんは、氷川町海沢(現・奥多摩町)の自宅から学徒動員先の大神航空のある中神駅に通勤途中、空襲警報発令により昭和前駅(現昭島駅)で電車を降りて氷川に引き返す途中、電車への銃撃に遭遇しました。隣席にいた男性の脚部を貫通した銃弾が、不幸にも牧野さんに命中してしまい、付き添いの教師の指示ですぐ東青梅の医院へ運ばれました。胸の名札の血液型と同型の者三人も同行したのですが、助かりませんでした。付き添っていた人たちは、息絶えた牧野さんにとりすがって泣いたといいます。隣席にいた男性は梅林健一さんで、下半身を失う重傷を負いました。(話者は、被害者に最後まで付き添った牧野さんの同級生のご家族(90 歳)です。その方の話をもとに、その他の史料からも付加しました。)

P51(ノースアメリカン P51 ムスタング)戦闘機の 6 機編隊が市内上空を通過した際、そのうちの 1 機が突如、東青梅駅構内に停車していた電車に機銃掃射を行ったものでした。

なお、東青梅駅と同時期に、根ヶ布にある印刷工場・精興社でも、艦載機によって急降下爆撃されています。精興社は、海軍水路部からの発注で海図を印刷していました。

2. 二俣尾（平溝）

昭和 20 年 4 月 24 日昼頃、市域を東方から西方へ向かって通過した B29 から投下された焼夷弾 1 個が、榎峠の南側に建つ阿部氏宅を直撃しました。家族 4 人（奥さん、女の子 2 人、妹）と近所の阿部カネさん（当時 20 歳）がお茶を飲んでいるところでしたが、爆破全焼したため 5 人全員亡くなりました。阿部カネさんは、昭和飛行機に出勤のため軍畑駅まで行ったところで空襲警報が出たため引き返して、たまたま立ち寄っていたところでした。

さらに、もう 1 個が阿部氏宅の南側の山中に落ちましたが不発弾であったようで、昭和 55 年頃、自衛隊によって撤去されています。

3. 藤橋

昭和 20 年 7 月 30 日午後 1 時頃、北北西方向から木野下の上空を経て、低空飛行で P51 が飛来しました。農作業中の貫井藤作さんを標的に機銃掃射がありましたが、幸いにも当たらずに、道路南側に建っていた藁ぶき納屋から火の手が上がり焼失しました。

4. 根ヶ布

昭和 20 年 8 月 10 日、P51 と推定される艦載機が、根ヶ布の山頂付近に建つ送電線の鉄塔をねらって小型爆弾を落としました。近くの谷戸田で稲作の手入れ作業をしていた黒沢の山崎平重さん（明治 43 年生まれ）は、爆音に気づいて松林に避難しましたが、不運にも爆弾の破片が首筋を直撃したため、亡くなってしまいました。平重さんの弟さんによると、平重さんは 34 歳で、数か月前の 5 月に結婚したばかりで、お寺の戒名帳には、「霞村根ヶ布ニテ敵爆弾片ニ即死ス」と記載されているといえます。

（文責 三好ゆき江）

参考文献

青梅市史編さん委員会（1995）空襲の激化そして敗戦『増補改訂青梅市史下巻』．202～203

伊藤広光（2005）戦時下の奥多摩 郷土研究（16）．22～23．（奥多摩郷土研究会）

角田清美・小川秋子・鈴木晴也・三好ゆき江（2006）柚木町の山中に墜落した四式重爆撃機「飛龍」と旧西多摩郡内における戦争の傷『青梅市文化財保護指導員連絡協議会活動報告書第 21 号』．34．40～41．

小川秋子（2015）青梅の戦争の足あと『青梅おちこちこぼれ話』254．259～260．